

『黒花嫁 ～龍王の甘い褥～』

著:水月真兎

ill:水名瀬雅良

風呂から上がり、ベッドに入った龍生は、また書類に目をとおしている。

世界中に散らばった広龍会の末端組織を統(とう)轄(かつ)しているこの男が、一日にどれくらいの書類を見ているのか、翔には想像もつかなかった。

昼間、無邪気に翔と取っ組み合っていた龍成も、十数年後にはこうなっているのだろうかと思うと、なんだかせつない気がする。

「まだ寝ないのか？」

毛足の長いカーペットの上で真っ白な毛布にくるまり、ふかふかの羽根枕に頭を預けて、案外、快適な寝床の中から、翔は男に向かって問いかけた。

「眩しいか？」

ベッドの枕元には、書類を読むためのほのかな明かりが点(とも)っている。それで、翔が眠れないのだろうか、龍生は気遣うように訊(たず)ねた。

「真っ昼間の公園でだって熟睡できるよ、俺は……」

「なら、寝ろ」

男の返事は、どこまでも素っ気ない。

自分の色香をアピールするつもりも、今の翔にはなかったけれど、少しぐらいは心配していることも、理解してもらいたかった。

「疲れないのか？ 朝から夜遅くまで、そんなにしゃかりきに仕事して……」

「別に……」

すでに、こうやって一日中仕事をすることに、体が慣れてしまっているのだろうか。疲労を感じることにすら忘れていたような男に、感心するよりもただ呆れるばかりだ。

「いつも、そうなのか？」

「ああ……」

文章の内容に神経を集中しているらしく、龍生は気もそぞろな調子で答える。

「龍成が淋しがっていたぞ」

息子の名前には、別の神経が働くようになっているのか、龍生はようやく書面から視線を上げた。

「あれは、おまえにすっかりなついたらみたいだな」

「らしいな」

ゲイの翔に自分の息子がなついてしまったことを、龍生はどう思っているのだろうか。その口調からは、あまり嫌がっているようには聞こえない。

「子供に好かれるようなタイプには見えなかったが……」

「俺も驚いた。ガキは苦手なんだが……」

翔自身にとっても意外なのだから、龍生が奇妙に思っても当然だと笑い返した。

その笑顔を、龍生はいっそうしげしげと、なんだか理解できない生物でも観察しているみたいに見つめる。

「不思議な男だな、おまえは……」

「俺には、あんたのほうがるかに不思議だよ。マフィアのくせに、一人の女に一途で、勤勉で、おまけに子供には甘い」

多分、こういう男だから、広龍会の中でもひととき人望を集めているのだろうが、翔には、龍生みたいな人間が裏の世界にいることが信じられない。

お互い様だと辛辣に言い返した翔に、龍生はひっそりと苦笑を浮かべた。

「褒(ほ)められているのか、けなされているのか、わからないな」

「どっちでもいいが、俺はけっこう気に入っている……」

七音から仕事の依頼を受けた時には、李龍生がどんな男なのか見てみたいという単純な好奇心だけだった。

けれど、実際に龍生に会って、言葉を交わして、彼のことをもっと知りたくなった。肌を合わせて、この冷たそうな男が隠し持っているはずの情熱まで感じてみたい。

薄い琥珀色の瞳に映る妖しい情欲の炎さえ隠さない翔に、龍生は軽く眉の端を上げる。

「それはどうも……」

「汚らわしいって、言わないんだな」

まだ今朝のことを根に持っているように繰り返す翔に、男は、意外なほどやわらかく口元を綻ばせた。

「少し、考えを改めようかと思っている。どうやら龍成には、おまえが必要らしい。あの子のあんな生き生きとした顔を、久しぶりに見た」

龍生自身ではなく、息子が気に入っているからというのは、翔にとってどれほど落胆させられる科白か、どうせこの朴(ぼく)念(ねん)仁(じん)にはわかっていないのだろう。

「あんた自身はどうなんだ？」

「うん？」

自分のほうから、直接訊いてみるしかないだろうと口を開けば、案の定、予想もしていなかったような表情を返された。

「俺は、あんたの花嫁なんだぜ」

「面白い男だとは思いますが……セックスしたいかどうかは」

続ける言葉を曖(あい)昧(まい)に濁(にご)して、龍生は広い肩を竦めた。けれど、この男の口からセックスと言われただけでも、翔には驚き以外の何ものでもない。

「まあ、俺とセックスするかどうか、考えるようになっただけでも進歩だな」

「かもしれん」

それは、少しは期待してもいいことなのかと鎌をかけた翔に、やはり龍生は拒絶も否定もしなかった。

ここまで素直だと、なんだか不気味なくらいだ。あまり追及すれば、かえってやぶ蛇(へび)になりかねない気がして、翔は話をそらした。

「しかし、龍成のことだが……。あの歳の子供が、家に閉じこもりっぱなしなのは感心しないな。ちょっと遅いが、公園デビューとかさせる気はないのか？」

「なんだそれは？」

いくら龍生が日本語に堪(たん)能(のう)だといっても、さすがにそこまでは把(は)握(あく)していなかったらしい。意味不明だと問いかけてくる。

「子供には、子供の遊び相手が必要ってことだ」

翔に言われるまでもなく、息子思いの龍生が、それを考えなかったはずはない。け

れども、彼はひどく難しい顔つきで、眉を顰(ひそ)めた。
「言葉には不自由しなくなったし、そろそろどうにかしなければとは思っているんだが。
……今は時期が悪い」
「どこの鉄砲玉に狙われてるんだ？」
この男が時期が悪いなんて言うのは、その手の理由しか考えられなかった。直(ちよ
く)截(さい)に訊ねた翔に、龍生は微かに苦笑する。
「おまえが相手だと、話が早いな」
「悪かったな、あばずれの花嫁で」
翔だって、好きで裏の事情に詳(くわ)しくなったわけではない。龍生にそんな顔をさ
れると、どうすればいいのかわからないと、拗(す)ねてみせた。
「悪くはない。青(チン)牙(ヤー)だ」
ずけずけものを言う自分が嫌われているのかと思えば、むしろ逆だったらしい。翔の
毒舌を楽しんでさえいるような男は、やはり大物だった。
龍生が口にした組織の名前は、翔にも聞き覚えがあった。嫌われていないのなら、
もう少し、龍生の内情に踏み込んでもいいだろう。
「香(ほん)
港(こん)
系だな。縄張り争いか？」
「そんなところだが……。王(ワン)青(チン)人(レン)とは、昔から少し因縁があつてな」
言われてみれば、龍生と青牙の首領である王青人とは、ちょうど同じくらいの年頃だ。
台湾マフィアの一族と、香港マフィアの首領が昔馴染(な)染(じ)みでも、おかしくはないだ
ろう。
因縁という言葉には、なんだか穏やかではないものを感じたけれど、ふと、翔の頭
に浮かぶものがあつた。
「女でも寝取ったか？」
この男に限ってまさかと思いながらも、率直に口に出した翔に、龍生はなんともいえ
ない複雑な笑みを浮かべる。
「察(さ)しがいいな」
「マジかよっ。……あんたを誤解してた。エロオヤジッ！」

本文 p56～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>